

の獣耳を引っ張って見せるスペインも、困り声だった。
「これどないなるん？」

混濁する思考を抱えつつも、昨夜の出来事を掘り起こし始めたイギリスが、何かに思い立ったように口を開いた。

「・・あゝ、確か・・」

そして、何かを言いかけた瞬間、それを遮るように携帯の着信音が鳴り響いた。

「もう誰やねん！」

この忙しい時にと零しながら、ベッドボードからスマホを引きずり下ろしたスペインは、着信相手を目にした途端、悲鳴に近い声を上げた。

「ギャー！」

何事だと顔を向けるイギリスに、スペインは蒼白な顔で詰りめ寄ってくる。

「ど、どないしょ、今日、し、仕事やった」

着信の表示は簡潔に『王宮』となっているが、職場からの電話なのは、聞かなくとも分かる。

一定のコールの後、止まった着信音は、そのまま留守電に切り替わったようだった。

しかし、今のところ解決方法もないイギリスが、返答に困っている内に、再び着信音が鳴り響いた。

「うわあゝ！また掛かってきた」

スマホから飛びのく姿は、恐怖で身を震わせる動物そのものに見える。

くると器用に尻尾を足と足の間に挟み込み、伏せられた耳が小刻みに震えている。

大きな肉球を合わせて祈っている内に、着信音が途切れると、安堵のあまり大きなため息が零れ落ちる。

しかし、それも束の間、再び着信音が鳴り響いた。

数回目ともなれば、音量の設定を変えてないのに、やけに大きく聞こえる。

このままでは出るまで続きそうで、大きく頂垂れたスペインは、大人しく携帯に出ようとしたり。

しかし、今の手のサイズとスマホの画面が合わず、一向に電話に出れない。

「あゝ、電話取ることも出来れへんのかいっ！」

癩癩を起した子供のように、布団の上にスマホを叩きつけるスペインに、笑いを堪えていたイギリスが、指先で器用にスライドさせた。

しかし、電話が繋がった途端、怒鳴り声が飛んできた。

「やっと起きたんですか!!昨日の書類どこですのん?今日は、来るとちやうんですか?」

捲し立てるように告げられる言葉は、一応敬語を使っているが、明らかに敬う気持ちよりも、怒りが勝っている。

普段の仕事態度が垣間見えるやり取りに、スペインも慌てて口を開いた。

「あんな、何かなつ、色々あってな、ぎゅゝって背が小さくなつてもてん!そんで耳とか尻尾があつてな・・わんこ?オオカミ?みたいになつてもてんよ、ほんで・・」

理解しがたい言葉の羅列は言い訳にすらなっておらず、スペイン自身も、何を伝えたいのか分からなくなってきた。

そして、思考がぶつつりと途切れてたまま黙り込んだスペイン